

研究ノート：欧州統合の提唱者、 クーデンホーフ・カレルギーの思想と行動

An Advocate of the European Integration, Coudenhove-Kalergi's
Original Idea and Activities

内藤 徹雄
Tetsuo NAITO

概要

欧州統合の歴史をさかのぼると、第一次世界大戦後、“汎ヨーロッパ論”を唱えたクーデンホーフ・カレルギーの名前が浮かび上がる。クーデンホーフは、欧州統合に関して具体的かつ論理的な提案をした最初の人物である。彼のアイデアは、第二次世界大戦後に発足したEECからECを経て現在のEUに至る過程の中に具現している。しかし、クーデンホーフは欧州統合の歴史の中では、なぜか影が薄い。

本稿では、クーデンホーフの唱えた欧州統合論の内容とその思想的背景について考察し、彼に対する評価についても言及する。併せて彼の生い立ちやその生涯についても紹介したい。

なお、欧米の先行研究などの資料収集が不十分で、未だ研究途上にあるため、本稿は「研究ノート」として掲載する。

キーワード：欧州統合、EU（欧州連合）、共通通貨「ユーロ」、汎ヨーロッパ論

Abstract

Tracing to the history of the European Integration, we can find Coudenhove-Kalergi, who advocated the theory of “Pan-Europe” after World War I. He was the first person who could make the definite and logical proposal on the European Integration. His idea was realized on the present EU and its former organizations, EEC and EC. However, Coudenhove-Kalergi doesn't seem impressive in the history of the European Integration. In this thesis, I make a study of the content and the ideological background of the European Integration which suggested by Coudenhove-Kalergi. And I would like to refer to the comment on his works by the academic circle, etc, as well as his career.

This paper is written not as a research paper but as a study note because of lacking materials such as the existing research results in the western countries.

Keyword: European Integration, European Union, common currency “Euro”, theory of Pan Europe

目次

1. はじめに
2. クーデンホーフの生い立ち
3. 汎ヨーロッパ論（欧州統合論）の内容と背景
 - 3.1 汎ヨーロッパ論の内容
 - 3.2 汎ヨーロッパ論の目的
 - 3.3 汎ヨーロッパ論の特徴
 - 3.4 汎ヨーロッパ論の思想的背景
4. クーデンホーフのその後
5. クーデンホーフの評価
6. おわりに：クーデンホーフの思想から学ぶこと

1. はじめに

1990年代に入り、欧州の統合は急速に進展した。93年末にEC（欧州共同体）を継承したEU（欧州連合）の創設を経て、99年1月には共通通貨「ユーロ」が誕生し、現在EU12カ国で使用されている。通貨を複数の国家間で共通化することは大変な難事である。国家主権の一部である通貨主権の放棄は、その国の金融政策を放棄することに他ならないからである。加えて、通貨「ユーロ」の出現は長年親しまれた各国の通貨、即ちマルク、フラン、リラなどの消滅を意味し、国民感情からも受け入れがたい面があるからである。「ユーロ」の導入に次いで、EUは2004年5月、東欧10カ国の参加を得て25カ国に拡大した。欧州の統合がよくここまで進んだというのが誰しも抱く感慨であろう。

ここで欧州統合の背景について考えて見たい。欧州統合を推進した原動力は二つあるといわれている。ひとつは経済面から見たものであり、もうひとつは政治面からのものである。

経済的側面から見ると、欧州の統合はまさに「規模の経済」を追及したものだといえよう。より大きな市場での経済活動は、より高い経済効率を生み経済発展に資するという経済理論に合致する経済行為である。なかでも、ユーロ圏の形成は、単に共通通貨の使用による為替リスク排除という利点のみならず、商品や通貨のより活発な流通を通して経済の活性化が可能になる。加えて、将来「ユーロ」を米ドルに拮抗する国際通貨として育成し、欧州経済圏の世界経済における影響力の増進を図るという意味でも重要である。

しかしながら、欧州統合の推進力としてより重要なのは、むしろ政治的側面であろう。第二次世界大戦後、「再び欧州に戦争を起こしてはならない」、そして「欧州に恒久平和を築くにはどうしたらよいか」という問題が提起された。その答えとして、「国家間の対立や戦争の根源である国家を超越する枠組みが必要である」という提案がなされ、次第に「いっそ国境をなくそう」という考え方に変化していった。

ドイツのコール元首相は「ユーロを経済的側面だけで見るのは正しくない。ユーロはまさに戦争を避けるためのものである。21世紀の欧州が平和な社会になるかどうかはユーロの成功にかかっている」と述べている¹⁾。

欧州の統合が現在の段階にいたるまでには、1951年の欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）の発足以来50年以上にわたり、各国の利害の対立があり紆余曲折があった。しかし、欧州の歴代のリーダー達に、「欧州に2度と戦争を起こしてはならない」という強い信念と哲学があったため、共通の通貨が実現するほどまでに統合が進んだのである。

今後、欧州は通貨統合を経て経済的統合を完成させ、いずれ政治的統合へと進み欧州連邦（合衆国）を結成する道を歩むであろう。

さて、こうした欧州統合の歴史をさかのぼると、第一次世界大戦後の1923年に“汎ヨーロッパ”を出版して欧州統合を提唱し、その実現に向けて行動したりヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー（以下、クーデンホーフと略）の名前が浮かび上がる²⁾。(表1)

表1. 欧州統合の歴史

1918年	第1次世界大戦終結
23年	汎ヨーロッパ運動の開始（クーデンホーフ・カレルギー）
45年	第2次世界大戦終結
51年	欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）の発足
57年	欧州経済共同体（EEC）の発足
67年	欧州共同体（EC）の発足
73年	英国、アイルランド、デンマークのEC加盟
79年	欧州通貨制度（EMS）の開始
81年	ギリシャのEC加盟
86年	スペイン、ポルトガルのEC加盟
90年	東西ドイツの統一 英国の為替相場メカニズム（ERM）参加
92年	マーストリヒト条約調印
93年	単一市場スタート マーストリヒト条約発効 欧州連合（EU）の発足
95年	オーストリア、フィンランド、スウェーデンのEU加盟 単一通貨の名称を「ユーロ」に決定
98年	通貨統合参加国正式決定 欧州中央銀行（ECB）発足
99年	通貨統合開始
2002年	ユーロの紙幣・硬貨の一般流通開始
2004年	EU15か国から25か国へ（東欧10か国の加盟）

本稿ではクーデンホーフに焦点を当てて以下の問題意識ないし論点について論じる。

- (1) クーデンホーフの欧州統合思想とはどんな内容であったのか。
- (2) クーデンホーフの思想的背景は何であったのか。

- (3) クーデンホーフの業績・活動はどのように評価されているのか。
- (4) クーデンホーフの思想から何を学ぶのか。

2. クーデンホーフの生い立ち

クーデンホーフは、1894年（明治27年）駐日オーストリア代理公使ハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギーと妻光子の次男として東京で出生した。本名はリヒャルト・クーデンホーフ・カレルギーであり、日本名では栄次郎と名付けられた。父ハインリッヒの祖国は当時の欧州5大強国のひとつオーストリア・ハンガリー帝国であり、現オーストリア共和国の約4倍の国土を持つ大帝国であった。その皇帝は12世紀以来代々神聖ローマ帝国の皇帝位を継承してきた欧州一の名門ハプスブルグ家であり、クーデンホーフ家はハプスブルグ家に仕える貴族（伯爵）であった。

母光子は東京の地主兼骨董商の青山喜八の三女であり、二人はラブロマンスの末1892年（明治25年）結婚し、東京に在住、その間に男子2人に恵まれた。一家は1896年（明治29年）オーストリアに帰国し、クーデンホーフ家の領地であるボヘミア地方（現チェコの西部）のロンスペルク城に住むことになった。母光子は家庭教師について、ドイツ語、英語、フランス語や数学、歴史、地理などを学び、ヨーロッパ人としての教養を必死で身につけたといわれている。彼女は大変聡明で、また負けず嫌いであったという。その間、4男3女に恵まれ幸せな生活を送っていたが、帰国10年後の1906年、夫ハインリッヒが急死し、32歳で光子は未亡人となった。クーデンホーフ家の遺産相続争いに勝利した光子は、子供たちの教育のため、1908年ウィーンに転居した。

光子は、ウィーンではシェーンブルデン宮殿の社交の場でヨーロッパ流の礼儀作法を身につけて堂々と振舞い、“黒い瞳の伯爵夫人”として社交界の華とたたえられたという。三女のイーダの書簡では、「母はウィーンで、優雅で美しく装い、快活で機知に富み、魅力的な女性としてサロンの中心であった」と母親をたたえている³⁾。

しかし、平穏な生活は長くは続かなかった。オーストリア皇太子のサラエヴォ（ボスニア）での暗殺事件を契機に、オーストリアのセルビアへの宣戦布告、そして1914年第一次世界大戦が勃発した。クーデンホーフ親子は領地のあるボヘミアへ疎開した。

1918年戦争はオーストリアを含む同盟国側の敗戦で終わり、まもなくオーストリア帝国は瓦解し、多くの民族国家に分裂した⁴⁾。クーデンホーフ家の領地のあるチェコスロバキアは独立を果たし、クーデンホーフ家は領地の多くを政府に没収された。

その後、光子はウィーン郊外に隠棲し静かに余生をおくり、1941年、太平洋戦争の直前に67歳で没した。

3. 汎ヨーロッパ論（欧州統合論）の内容と背景

3.1 汎ヨーロッパ論の内容

光子の次男クーデンホーフは、1917年にウィーン大学を卒業し、1923年、弱冠29歳で「汎ヨーロッパ」を出版し、欧州の統合を呼びかけた。

彼のアイデアでは、欧州の統合は次の4つの段階を経て行われる⁵⁾。(表2)

表2 “汎ヨーロッパ論”の内容

階段	内 容
①	欧州議会の開催（各国代表から成る） 欧州議会の下に、軍縮、関税、通貨、仲裁裁判等の委員会を設置
②	欧州相互安全保障条約の締結
③	欧州関税同盟、通貨同盟の結成 → 単一の経済圏を指向
④	欧州合衆国の設立：外交、国防は合衆国政府が、その他は各国政府が行う。

議会：2院制－民族院（各民族100万人あたり1名の代表）、國務院（26か国より各1名の代表）	
・最終目的→世界連邦の設立、欧州統合はその前段階 世界を5つの地域国家群（ブロック）に分割→欧州、米州、東アジア、英連邦、ソ連各ブロック 毎に統合を行い、世界連邦に至る。	

（クーデンホーフ全集第1巻より作成）	

①まず第1段階として、各国代表からなる欧州議会を開催する。そして、欧州議会の下に、軍縮、関税、通貨、仲裁裁判等の委員会を設置し、こうした各種委員会で統合への具体案を作成する。

なお、議会は2院制からなり、民族院（各民族100万人あたり1名の代表）と國務院（全26か国より各1名の代表）より構成され、欧州統合の最高議決機関となる。

②次の段階では、軍縮委員会の作成案に基づき、欧州相互安全保障条約を加盟国間で締結する。

この条約によって、まず欧州域内の安全保障を確立し、戦争への懸念を払拭する。

③第3段階では、関税委員会でまとめられた案に基づき欧州関税同盟を結成し、対外共通関税を設定する。また、欧州域内では徐々に各国の関税を逡減する。同時に、通貨委員会案に基づき通貨同盟を結び、これを基盤に将来的には単一通貨の実現を指向する。この段階が完成すると、欧州は単一の経済圏となる。

④第4段階は、いよいよ政治的統一の段階である欧州合衆国の創設である。欧州合衆国では、外交と国防は中央政府が、その他の諸政策は各国政府が行うという案になっている。

⑤なお、クーデンホーフの提案は欧州の統合にとどまらず、最終目的を世界連邦の設立においており、欧州の統合はその前段階に位置づけられている。

世界連邦への道筋として、世界を5つの地域国家群（ブロック）に分割し、各ブロッ

ク毎に統合を行い、最後に世界連邦を形成するという案が示されている。5つのブロックとは、欧州（除く英国）、南北アメリカ、東アジア、英連邦、ソ連である。英国は世界に広大な植民地を持つため欧州とは別に英連邦として1ブロックを、ソ連は社会主義国家であるためこれも別に1ブロックとするという、当時の世界情勢を考慮したきわめて現実的な考え方である。

クーデンホーフ提案のユニークさは、世界連邦までの道筋を展開したことであり、当時としては途方もない構想であった。クーデンホーフの気宇壮大なコスモポリタンとしての考えがここに反映されているといっても過言ではないであろう。

3.2 汎ヨーロッパ論の目的

では、なぜクーデンホーフはこうした当時としては画期的な提案をしたのであろうか。彼の「汎ヨーロッパ論」提唱の目的は、①欧州の再生と②戦争の防止の2点にあった。まず、欧州の再生とは、文字通り欧州を再び世界の中心として復興し発展させようということである。欧州は18世紀の産業革命以来、政治、経済、軍事、文化において世界の中心であったが、第一次世界大戦を境にこれまでの繁栄から転落して、荒廃し没落の危機にあった⁶⁾。これとは反対に新興勢力の米国、日本、ソ連などの勢いが著しく伸長し、世界を主導する国家となりつつあった。クーデンホーフの懸念の一つは、社会主義ソ連の影響力の拡大が小国分立の欧州の危機につながることであった。

またクーデンホーフの落胆は、彼の祖国オーストリアの没落であった。オーストリアは、1919年のパリ講和会議で米国大統領ウイルソンの唱えた民族自決の原則により帝国を解体され、東欧の小共和国に転落したのである。クーデンホーフはこうした欧州及び祖国を再び復活させるには、ヴェルサイユ体制のような多くの民族国家よりなる欧州ではなく、欧州をひとつの国家に統合するしかないとの考えを抱くにいたった。その根拠のひとつは、米国は多民族国家でありながら、一国として独立し繁栄していることであり、欧州もかつての栄光と繁栄を回復するには、国家間の統合が必要であるという主張であった。

第2の目的は、悲惨な戦争を防止するためには、欧州の統合が不可欠であるとの主張であった。実際、第一次世界大戦の被害は甚大であった。連合国側、同盟国側併せて6500万人の兵力が戦い、死者850万人、負傷者2100万人という有史以来最大の人的被害をこうむったのであった⁷⁾。クーデンホーフはこうした惨状を見て、再び戦争が起こらない欧州になるためにはどうしたらよいかを真剣に考え抜いたのであった。その結果、「戦争は国境をめぐる争いから始まる。争いをなくすには国境そのものを廃止すべきだ」という考えにたどり着いたのであった。

3.3 汎ヨーロッパ論の特徴

ここで、クーデンホーフの主張の特徴についてまとめておきたい。

第1の特徴は、前述のとおり、米国大統領ウイルソンの唱えた民族自決主義に基づくヴェルサイユ体制に反対したことである⁸⁾。第2には、クーデンホーフは経済の実態に着目したことである。彼は、「実際の経済の動きはすでに国家の規模を越えているが、政治は依然として小さな民族国家が支配している。この結果、経済の規模と政治の規模に大きなずれが生じており、これが戦争の原因のひとつとなっている。政治的規模を経済の実態に合わせる必要がある」と主張している⁹⁾。これは当時としてはまさに慧眼であり、戦争の原因について正鵠を得た主張といえよう。

第3には、欧州で犬猿の仲であったドイツとフランスの融和、協力が欧州の統合に不可欠であることを主張したことである¹⁰⁾。独仏間では鉱物の豊富な国境地帯のアルザス・ロレーヌ地方をめぐる、過去100年間に3度の戦争を行い、これが欧州の戦争の引き金となってきた¹¹⁾。その結果、独仏両国民の間には根深い対立感情が残り、これが欧州の融和と協調体制の大きな妨げとなっていた。クーデンホーフは独仏の融和を前提に欧州の統合を提唱したのである。

3.4 汎ヨーロッパ論の思想的背景

最後に、なぜクーデンホーフはこうした考えを抱くにいたったかについて考える。

クーデンホーフの思想的背景として以下の3点があげられる。

第1には、クーデンホーフ家の血統である。クーデンホーフ家の先祖をたどると、オランダ、ドイツ、ロシア、イタリア、ギリシャの血が流れている¹²⁾。こうした血筋に母親が日本人であるため東洋人の血が50%混じったクーデンホーフは民族とか人種にとらわれない考えを持っていたといえよう。ちなみに、彼の妻はユダヤ人であった。彼は民族的ナショナリズムに反発し、「血の純粋性を誇りえる民族は、この地球上には存在しない。どの民族も多くの人種の血が混じっている」と述べている¹³⁾。こうした考えからナチスのゲルマン民族優越主義を真っ向から批判したため、ナチスに追われることとなる。

第2には、クーデンホーフの考え方は、大変純粋かつ理想主義的であったが、これは母親光子の影響があったと考えられる。幼き日に母親に日本の童話、例えば「桃太郎」を読んでもらったとの彼の回想があるが、おそらく、その純粋な正義感がそこで培養されたのではないかと思われる。また、彼の欧州統合思想は物事を総合的かつ統一的に考察した結果できたものであり、西洋的なものの見方、すなわち物事を分析的、解剖学的に考える思考方法とは異なっている。むしろ、東洋文化の持つ、全体的なもの見方に立っており、幼き日に東洋の文化に感化された結果ということも出来よう¹⁴⁾。

なお、10歳のときに死去した父ハインリッヒの影響を受けた節がある。ハインリッヒ

もまた、若き日に人種、民族の平等を唱え、反ユダヤ主義など人種差別を批判し「ユダヤ人排斥主義の本質」という著書を著している¹⁵⁾。

4. クーデンホーフのその後

前述のとおり、クーデンホーフは、1923年「汎ヨーロッパ」を出版し、欧州全土で汎ヨーロッパ運動を展開した。彼の説く欧州統合論は、第一次世界大戦後の欧州の再生と復活を模索する当時の各国リーダー達の目にとまり、次第にその支持を獲得していった。そのリーダーとは、エリオ（フランス首相）、ブリアン（フランス外相）、シュトレゼマン（ドイツ外相）、チャーチル（英国）などであった。

クーデンホーフの精力的な活動の結果、1926年には第1回汎ヨーロッパ会議がウィーンで26カ国の代表を集めて開催された。しかし、その後の時勢はクーデンホーフに味方しなかったのである。

その端緒は、1929年、ニューヨークの株式市場が大暴落し、世界恐慌が始まったことである。この結果、欧州各国は自国経済の再建を最優先課題とし、保護主義的政策を採るようになった。このため、欧州統合とは正反対の政策を採るようになり、クーデンホーフの統合運動は次第に後退していったのである。

次には、不運にもドイツにおいてナチスが台頭したことである。1933年、ヒトラーが首相の座に就いてナチスが政権を獲得したが、ナチスは排他的なゲルマン民族優越主義を掲げてクーデンホーフの汎ヨーロッパ運動を弾圧し始めたのである。こうして1920年代に欧州を風靡した汎ヨーロッパ運動は1930年代にはいと急速に衰退に向かった。

1938年ドイツがオーストリアを併合した。ウィーンに居たクーデンホーフは間一髪でナチスの手を逃れてスイスに逃亡し、その後フランス、スペイン、ポルトガルを経て米国に渡った。戦争中はニューヨーク大学教授に就任し、米国で汎ヨーロッパ運動を推進した。戦後は、スイスに住み運動を継続したが、すでに欧州統合の主役は戦後欧州の指導者たちが担っていた。昭和42年には、日本に来日して天皇陛下に謁見し、勲一等瑞宝章を授与されている。1972年、78歳でスイスで死去した。(表3)

5. クーデンホーフの評価

これまで述べたクーデンホーフの汎ヨーロッパ論の考え方は、戦後の欧州統合の過程で随所に取り入れられている。例えば、欧州統合にはドイツとフランスの融和が不可欠であるとの彼の考えは、今日のEUの元となった欧州石炭鉄鋼共同体の青写真であるシューマンプラン（仏外相シューマンの案）にドイツ・フランスの融和を前提に石炭・鉄鋼の共同

表3. リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー略歴

1894年	駐日オーストリア代理公使ハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギー、妻光子(旧姓青山)の次男として東京に生まれる。日本名エイジロウ
1914年	ウィーン大学に入学、哲学、近代史を専攻
1923年	「汎ヨーロッパ」出版
1926年	第1回汎ヨーロッパ会議開催(ウィーン)
1932年	第3回汎ヨーロッパ会議開催(スイス・バーゼル)、ナチ・ドイツに反対決議。
1938年	ナチのオーストリア侵入際スイス大使館に難をのがれる。
1940年	スイスよりフランス、スペイン、ポルトガルを通過してアメリカに渡る。
1941年	母・光子死去(69歳)
1944年	ニューヨーク大学教授となる。
1966年	第10回汎ヨーロッパ会議を開催(ウィーン)
1967年	10月来日、天皇陛下、皇太子殿下に謁見
1972年	スイスで死去(78歳)

(クーデンホーフ・カレルギー全集第8巻等より抜粋)

運営をするという案として取り入れられている。

また、その後のEEC、EC、EUの推移の中に、80年前にクーデンホーフが唱えたアイデアが共通関税の導入とか共通通貨という形で反映している。こうしたことから、欧州統合の歴史の中でクーデンホーフの貢献はもっと高い評価を受けても良いと思われる。

欧州では、EUの生みの親はシューマンプランというのが定説であり、EUの父はシューマンプランを推進し、欧州石炭鉄鋼共同体を発足させたフランスの実業家ジャンモネといわれている。

米国ではクーデンホーフの名前がマスコミに登場するのは珍しいといわれている。米国亡命時に当時の大統領ルーズベルトはクーデンホーフを無視し、面談申し込みを拒否している¹⁶⁾。その理由はクーデンホーフが米国の主導したヴェルサイユ条約に反対したからという説や、第二次世界大戦後の米国の世界戦略として米国の主導権を確保するために欧州統合案に反対であったという説、さらにクーデンホーフが敵国日本人を母に持っているからという説などがあるが定かではない。

英国ではとくにEU研究家はクーデンホーフを無視しているが、これはクーデンホーフの統合案では、英連邦を欧州ブロックとは別に設けて英国を欧州から除外したということに起因するといわれている。

ソ連はスターリン批判をするクーデンホーフを嫌っており、クーデンホーフが3回ノーベル賞候補になりながら受賞を逸したのは、ソ連との関係が原因ではないかという憶測もある位である¹⁷⁾。

また、EUの歩みは過去50年にわたり紆余曲折があり、この間欧州の大物政治家がその推進に関与した。フランスではドゴール、ポンピドー、ジスカール・デスタン、ミッテラン、ドイツではアアデナウアー、シュミット、コールといった大物政治家達である。戦後のクーデンホーフは欧州統合の政治過程では既に過去の人だったということもいえる。

クーデンホーフの日本での評価はその母、光子の著名さもあり、またクーデンホーフ全

集（1971-72、鹿島出版会）も出版されており、知る人ぞ知るという程度ではあるが欧米よりは高い。

しかしながら、日本のEU研究者もクーデンホーフをあまり文献に採り上げていない¹⁸⁾。

幸いなことは、1992年に欧州で歴史を共有しようとする試みとして、高校レベルの欧州共通の教科書「ヨーロッパの歴史」が出版されたことである。この本の中にわずかではあるがクーデンホーフの事跡が取り上げられている。以下はその箇所¹⁹⁾の抜粋である。

「オーストリアの貴族出身の、作家・政治家クーデンホーフ・カレルギーによって推進された汎ヨーロッパ運動は、多くの賛同者を集め、無視できない存在となった。だが、次の点については、意見が分かれていた。ひとつは、ヨーロッパ統合に至る過程に関して、次に、そこに属する国家と国民に関して、最後にどういう政治体制を採るべきかということについてである。しかし、誰もがヨーロッパ統合の必要性についてはよく理解しているが、主権国家の現実は、こうした理想の前にかかってないほど高く立ちはだかっていたのである。」

6. おわりに—クーデンホーフの思想から学ぶもの

クーデンホーフの思想は理想主義的ではあるが、その歴史観、国家観は学ぶべき点が多いと思われる。また、彼の先見性と物事の本質を見極める洞察力、そして理想実現にかけける情熱と行動力は素晴らしい。例えば、先にも紹介した「戦争は国境をめぐる争いから始まる。争いをなくすには国境そのものを廃止すべきだ」との発言は、現実離れした考え方ではあるが、これこそ戦争をなくす唯一の道であることは自明の理であろう。

また、「経済規模が国家規模を大きく越えており、ここから摩擦が生じ戦争になる。関税、通貨を統一すべきだ。」との発言は、当時としては飛躍した考えであったが、現在の世界の潮流はその方向に動きつつある。

さて、クーデンホーフの描いた道へと進む欧州と比較して、アジアや日本を考えると、クーデンホーフの考えから学ぶべき点はないだろうか。

「アジアで二度と戦争を起こさないために、国境を取り払おう」とか、「実際の経済規模に見合った市場を創設するために、アジア域内で関税を撤廃し、通貨を統一しよう」とか、目先の自国の利益だけでなく、アジア全体、世界全体を視野にいたれた政治的経済的ビジョンが生まれてもよいのではないだろうか。

折しも、2005年12月、初めての東アジアサミット（首脳会議、於クアラルンプール）が開催され、東アジア共同体の創設に向けて域内協力を進める方向が打ち出された。アジアが種々困難な問題を抱えながらもこうした未来図を描くのであれば、クーデンホーフの

理想と情熱と行動、そしてそのアイデアを半世紀もの長い時間をかけて実現してきた欧州の地道な動きを見習う必要があるのではないだろうか。

注

- 1) 「週刊東洋経済 (99.1.30)」 P.52-53
- 2) クーデンホーフの汎ヨーロッパ論及びその活動の事績については、クーデンホーフ全集 (全9巻、1971-72、鹿島出版会) 及び「鹿島守之助外交論選集」(1971、鹿島出版会) 他、鹿島守之助氏の著作の随所に見られる。
- 3) 木村毅著「クーデンホーフ光子伝」 P.207
- 4) 1919年サン＝ジェルマン条約により、オーストリア＝ハンガリー帝国の解体が決まり、ポーランド、チェコ、ユーゴ、ハンガリー等が独立し、オーストリアは面積、人口が元の約1/4の小共和国となった。
- 5) クーデンホーフ全集第1巻「第11章 パン・ヨーロッパへの道」、「付録2 ヨーロッパ合衆国論」、第2巻「第3章 ヨーロッパ統一運動」他
- 6) 当時、シュペングラー (1880-1936、ドイツの思想家) は、「西欧の没落」(1918-22) を著わし、“西欧文明は没落期を迎えている”と説いて人々に動揺を与えた。
- 7) 新世界史資料 (帝国書院) によれば、連合国側4218万人、同盟国側2285万人が戦い、双方合計で戦死者853万人、負傷者2121万人を出した。
- 8) 1918年、米国大統領ウィルソンが発表した第1次大戦後の平和原則の一つで、諸民族がそれぞれ自主的に政策決定できる必要性を唱え、戦後の東欧の小国分立につながった。
- 9) 前掲クーデンホーフ全集第1巻 P.128-130 他
- 10) 前掲クーデンホーフ全集第1巻 P.136-149 他
- 11) 19世紀初めのナポレオン戦争、1870-71の普仏戦争及び第1次世界大戦を指している。
- 12) 金丸輝男編「ヨーロッパ統合の政治史」 P.9
- 13) 前掲クーデンホーフ全集第2巻 P.26-35 他
- 14) 木村毅著「クーデンホーフ光子伝」 P.304
- 15) 前掲金丸編 P.11、前掲木村著 P.164-165
- 16) 前掲木村著 P.372
- 17) 前掲木村著 P.388
- 18) 前掲金丸編 P.8-21 には、クーデンホーフの生い立ちや基本的思想がわかりやすくまとめられている。
- 19) 欧州共通教科書「ヨーロッパの歴史」(1992) P.332

参考文献

- 「クーデンホーフ・カレルギー全集」全9巻 (1970-71、鹿島出版会)
金丸輝男編「ヨーロッパ統合の政治史」(1996、有斐閣)
石沢芳次郎著「欧州統合論」(1995、産業経済研究協会)
清水貞俊著「欧州統合への道」(1998、ミネルヴァ書房)
木村毅著「クーデンホーフ光子伝」(1976、鹿島出版会)
村木真寿美訳「クーデンホーフ光子の手記」(1998、河出書房新社)
南川三治郎著「クーデンホーフ光子—黒い瞳の伯爵夫人」(1997、河出書房新社)
欧州共通教科書「ヨーロッパの歴史」(1992)
NHK 特集「光子～二つの世紀末～」(1987年5月～6月、全5回)